

Tragic Heroine 像としての
Edith Dombey

溝 口 薫

Summary

Edith Dombey as a Tragic Heroine

Kaoru Mizoguchi

Edith Dombey in *Dombey and Son* has been often criticised as a melodramatic “pasteboard creature,” because she seems to be depicted rather theatrically and her actions and speeches seem incompatible. But in fact these are only superficial aspects of the character an analysis of which would reveal deeper realities.

According to Ian Milner, Dickens’s mode in Edith is primarily dramatic, and the “pictures” of her actions and features do not stop at the external level but go further to evoke the internal, suggesting and implying the primary conflicts and the passions involved in them. In this light, I make an attempt at a close examination of Edith’s psychology in order to reveal the submerged ambivalence in her mercenary marriage with Mr. Dombey. She finally emerges as a highly complex moral being and not at all as a sentimental “tragedy queen” that she is supposed to be. She in fact has greater potentiality for becoming the tragic heroine in *Dombey and Son*.

序

Charles Dickens の第7番目の長編小説である *Dombey and Son* (1846—8. 月刊分冊) は、Dickens がそれまでのどちらかといえば即興的な作風を改め周到な構成を練ることに努力し、深刻化してきた当時の社会と個人についてのヴィジョンをはっきりと打ち出すことに成功した「最初の大作」といわれ一般に高い評価を受けてきた作品である。もっともそれは大抵成金紳士で money-pride の権化のような主人公 Mr. Dombey を中心に考えられた場合であって、この小説における女性主人公達、わけでも Mr. Dombey にその美貌と貴族の血脈を「買われて」後妻となる Edith Dombey についてとなると、従来の批評家の大半は途端に手厳しい非難を展開してきたのである。F. R. Leavis などは、この種の class の人々について「何も知らない」Dickens が melodrama やその他三文小説の類いにそっくり頼った unrealistic で、浅薄な人物と断じ、せいぜい金銭主義的な社会の女性をめぐる悪弊を暴露する社会的意味を除外すれば、ほとんど見るべきものがないかのように述べている¹。そして同様の見解をとる批評家は今も少なくないのである²。

Edith がこのように軽視される一つの理由は、Edith の行動や態度の描写に flashing eye, burning brow, curled lip といった cliché が多用されたり、科白に自分の感情や行動の動機についての過剰なまでの説明や状況についての極度に rhetorical な道德批判が盛り込まれたりする等、その人物表現がしばしば「芝居趣味」に墮することによる。そしてもう一つの大きな理由と考えられるのは、そうした科白に窺われる内容と人物の行動が矛盾して見えるということなのである。例えば Dombey との結婚を金銭的墮落として徹底的な軽蔑、非難をする Edith はいかにも「良心的」pride に溢れるように見えるが、それにしても、彼女はいつも簡単に Dombey の求婚を受け入れることになる。また金銭づくの結婚を敢えてする自分に対して鋭敏な批判を行う等、いかにも内省力に富むかのように思われた Edith は、やがてはまるで総ての責任は Dombey 一人にあるかのように彼を怨み、挙げ句は駆け落ちという無謀な手段によって自滅と同義の報復を図ることになるのである。なるほど彼らが指摘する点に従ってみれば、Edith はいかにも sentimental な “tragedy queen”³ に見えるかもしれない。がだからといってこの人物が全く “melodramatic rhetoric”⁴ に依拠していると決めつけることはできないように思うのである。

Edith に関するこうした否定的見解を批判する Barbara Hardy は、彼らは Edith を「覚えている」極めて顕著な部分から判断し、むしろ提出されてくる描写を「読む」ことをしていないと指摘しているが⁵、これは注意すべき意見であろう。実際彼らは Edith の描写に mockery が欠落していることだけを証拠として、彼女を欠点や「悪」の要素のない人物と見なしているようであるが⁶、それは決して事実ではない。Ian Milner に拠れば、Edith における Dickens の手法は基本的に drama 的な手法なのであって、人物を表わすのに作者の解釈や分析によってするのではなく、専らその行為や表情の外見的・具体的描写をもってするという。さらにそう

した外見的描写は、見かけのレベルに留まるものでなく、むしろそれを通して人物の主要な conflicts や潜在的な passions までも喚起する力を持つという⁷。こうした指摘に照らしてみるならば、Edith を否定軽視する見解は、どうも strict な “realism cannons”⁸ をもってこの人物を眺め、その描写の中でも theatrical な特徴ばかりを問題とする余り、むしろ Edith の ambivalent な本質を見損ってしまったように思われるのである。そこで拙論は、その描写の暗示や含蓄に注意しながら、Edith を「読み」、指摘されてきた矛盾が実は、彼女の ambivalent で心理的にも複雑な内面から生じるものであることを明らかにする。そして、Edith がむしろその固有な性格のために破滅してゆく tragic heroine である可能性を示してみたいのである。

I

Edith の物語は、後継ぎ息子を幼くして亡くし野望の挫折を余儀なくされた Dombey が失意を慰めるために訪れた Leamington で彼女に出会う第21章から始まることになる。早速開始される Dombey の courtship がまず話の中心になるが、Edith は登場してから暫くは内心を吐露することがなく、専ら「冷淡」で「無関心そう」な外見の描写が主として提出されてくる。尤もそうした「冷えた」外見というのはむしろこの女性の official な態度であって、その内側には並々ならぬエネルギーと鋭敏さをもつ「良心」が隠されているということを知るのにはほとんど時間はかからない。Dombey の前で Romanticism や母性愛を称揚したり、その歓心を買うべく愚かにも娘の恋心を捏造しようとしたりする浅ましい母親 the Hon. Mrs. Skewton に対して Edith が示す素気ない返答や態度に、強欲や欺瞞に対する彼女の深い嫌悪や反発を汲みとるのは容易である。また Dombey の太鼓持ち役の Major Bagstock や Dombey の会社の manager の James Carker ら佞人に対して、また彼らの見えすいた追従に満足しきっている愚かなほどに自惚れた Dombey に対して彼女が瞬間的に走らせる視線の中に、欲得づくで破廉恥な人々に対する彼女の不快や軽蔑がいかに強いかを見て取ることも難しくない。しかしこうした「悪人」たちと対照されて浮かび上がってくる Edith の「良心」面ばかりに注目する場合、それは先にも述べたように、彼女が Dombey と結婚してゆく本当の次第を理解することは難しくなってくる。大事なことは「目立つ」墮落批判等に窺える「良心」的特徴だけでなく、それに伴う曖昧なあるいは矛盾する要素に敢えて光を照ててゆくということである。

例えば Dombey の courtship を受ける Edith の態度は必ずしも反発一色に彩られるわけではなく、その特徴的な寡黙さの中には妥協のニュアンスが漂っているように思われる。Edith は courtship に訪れる Dombey を「不本意な様子」でこそあれ「避けようとする気配もなく」迎え入れているし (369)⁹、また正式の見合いの申し込みに他ならない Warwick Castle への遠乗りをそれと知っていてなお断ろうとはしない (“Will I go!”) (450)。あるいは着々と進行してゆく結婚話の間中、Edith は private な場にいる時こそ剥き出しの憤怒や軽蔑を見せるのに反して、Dombey と居合わせる時には反発と妥協が相半ばする曖昧な態度に終始し、嫌悪や反抗心を決定的な形で示すことは絶えてしないのである。このような奇妙な態度からまず考えられるのは、Edith には Dombey との結婚を墮落として拒否する良心とは裏腹にそれを望む

mercenariness もあったということではないだろうか。

もっとも Edith の mercenary な欲望については Dickens は一切明示しようとはしないのでその直接の証拠は何もないわけである。だからといって Edith が後に Dombey と結婚した理由について「そうすれば少なくとも母親に忌まわしい人身売買よろしく売り歩かれる」(857) 屈辱を味わなくても済むからだったと述べているこの言葉ばかりを信用する必要もないのである。たとえば Edith の置かれていた状況を考え合わせて見てもよい。Edith は Dombey に出会った時点では30才足らずの未亡人であるのだが、彼女自身の発言にも明らかなように、前夫から寡婦財産を譲られておらず、少額の寡婦産 (a small jointure) で暮す母親に引き取られている。さらに Edith は、その後も Skewton 夫人によって財産獲得のため売り込まれてきたのだが、果してこの母子は社交界の笑われ者となり、斜陽の親戚筋とも交際が途絶え、数多くいた求婚者達ももはや全く寄りつかなくなったという皮肉な状況に陥っていたのである (473)。結婚が中流以上の女性にとって唯一の生活の手段と考えることが常識であった当時のことである。経済的に全く非独立かつ不如意な立場にいる未亡人が、再婚の見込みもない孤独な状況にあれば、その第一の問題は将来の生活不安であったらうことは想像に難くはない。まして自分の置かれた状況の社会的、経済的制限性を十分に把握していると思われる Edith であってみれば、Dombey の求婚を「神経の安まらない家庭から逃げ出す」¹⁰ 機会という以上に将来の生活の保証の機会として「計算」していたとしても決して不思議はないように思われる。

実際 Edith に mercenariness があることを下敷きにしてみれば、例えば彼女が “I loathe myself!” だとか “I have nothing else to sustain me when I despise myself.” (473, 474) と激しい自己嫌悪や自己軽蔑を示すことも納得がゆくし、さらに彼女の次のような表情も Edith が Skewton 的な価値観と自覚的良心の狭間にたつ存在であることを暗示するものとして理解されてこよう。

She [was]...totally regardless of herself and him [Dombey] and everything around, and spurning her own attractions with her haughty brow and lip as if they were a badge or livery she hated. (466)

Edith が自分の顔形の美しさなどの「数々の魅力」を「憎み」、「撥ねつけ」ようとするのは、それらこそ Skewton 夫人の mercenary な教育の成果として、望みもしないのに着せられた「仕着せ」、注入された価値観を意味するからである。しかし問題は、いくら自分を軽蔑したところでそれは脱ぎ捨てられるものではないということである。それは Edith 自身の「やりなおすには遅すぎる」との絶望的な告白にも窺える通り、彼女を根深く支配しているのである (474)。

この事に関連して、例えば自分の結婚を富と血脈の transaction に貶めて自嘲的に開きなおるような “So, we are genteel and poor, I am content that we should be made rich by these means.” (474) といった発言とか、あるいは “I am always at your [Dombey's] disposal.” (509) などという、なげやりな発言にも注意してみたい。ここには、結局自分の “better qualities” のためには道を打開することができぬゆえに、cynical な自棄に陥っている Edith を認めることができるからである。とすれば、Edith が「良心的」でありながら mercenary な結婚

を遂行してしまう次第は、それほど根拠のない展開ではなくなってくる。むしろ、そこには、鋭敏な「良心」を素質としては持ちながら結局それを具体化、実現する力を持たず、無謀な開きなおりに転じてゆく成長挫折者の姿を窺うことができるからである。

しかし今みたような性格要素を見るだけでは、EdithがDombeyと結婚するに至る事情の総てを説くことができないことは言うまでもない。例えば、Edithは呵責に悩まされて当然と思われる場面でむしろ恬然とした様子があることや、もう一つの矛盾面、即ち呵責の念とは掌を返したようにDombeyを糾弾する姿勢を強めてゆく面は、説明しにくい。そこで今度はEdithが己れの墮落についてどのように意識しているのか（あるいはしていないのか）を中心に細かくその描写を検討してみたい。そこには、彼女に固有なそしてさらに複雑な内面が窺われてくるようだからである。

II

Edithのもう一つの矛盾面を考えてゆく上で大切なのは、やはりその「墮落」の自覚について単純視し過ぎないということである。実際、A. O. J. Cockshutなどが、“Dickens could conceive of Edith selling herself for wealth.”と述べながらも結局この人物を“unconvincing”で“unsuccessful”と結論せざるを得なかったのは¹⁾、Edithが激しい調子で行う嫌悪や自己糾弾の表明の部分、わけてもその自己分析の明晰さばかりを中心に考えたからではなかろうか。そのためEdithの「墮落」の自覚が微妙な明滅を伴う不安定なものであることを見落してしまったように思われる。

そこでまず、Dombey等に対するEdithのいわゆるofficialな表情—「蔑み」に満ち、「冷淡」それで「倦怠」的な表情に漂うある曖昧さから考えてみたいのである。実際EdithがDombeyに向ける表情で奇妙なのは、時にそれがまるで墮落に対する嫌悪や葛藤を窺わせないように見える点なのである。例えば、Dombeyが求婚者というよりはまるで嫁の品質検査人のように接してくる時、Edithは、いかにも「不承不承な」顔付を相変らずみせているものの、むしろ我々の期待を裏切って「何の当惑もない全く平静」な態度で対応するのである(369-70)。そればかりではない。我々はDombeyのcourtshipが進行してゆく過程で何度かEdithの表情に強い'strife'が潜かに浮んで来るのを、悪魔的なCarkerの視線を通して見ることになるが、(おそらくその時こそEdithが葛藤を感じている真実の瞬間と見るべきだろう)興味深いことには、その表情に上った「相克」は、結局現れたかと思うと次の瞬間にはかき曇る「雲の如く」湧き出てきた「倦怠」と「蔑み」に充ちた例の表情の下へ「隠されて」しまうのである(458)。このような点から考えられることは、Edithは打算と批判の激しい葛藤を抱え己れの「墮落」に苦しむ存在であると同時に、むしろそうした葛藤自体から逃避する、或いは自己の「墮落」ないし「罪」意識を抑圧してしまう微妙に「不正直」な衝動をもった人物ではないかと思われてくる。

実際こうした逃避的とも自己防衛的ともいえる心理は単に抑圧という形だけでなく、もっと巧妙に彼女自身を欺く形でも現われてくるように思われる。例えばSkewton夫人とその旧知

の Bagstock 少佐と居合わせる時の Edith が他人の居る時と打って変わって内心の軽蔑を明らかに示すことには、やはり一種の曖昧さがつきまとう。そこに他者を「攻撃」することで自分の「罪」意識の不安とバランスをとろうとするような微妙な心理を認めることはできまいか。例えば Edith は内輪であれば、Skewton 夫人の見えすいた虚構に対して “It is surely not worthwhile, Mama … to observe these forms of speech. We are quite alone. We know each other.” とはっきり言い返したり、または母親が “my darling girl” などと呼びかけて母性愛を演出するのに対しては “Not woman yet?” と切り返し、調子を合わせることを一切せず (450)、その他同じような皮肉、あてこすり、口答えをしきりに繰り返す。それらは結局、本当に必要な「反抗」の代償行為とみなすことができるものだろう。Edith はその虚しさに気づいていない訳ではない。にもかかわらず彼女はこうした代償行為で満足してしまうふしもあるのだ。Edith が Skewton 夫人に向ける次のように強烈な軽蔑の中には、わけてもそうした微妙な歪みが垣間見えてこないだろうか。

The quiet scorn that sat upon her handsome face—a scorn that evidently lighted on herself, no less than them— was so intense and deep, that her mother’s simper, for the instant, though of a hardy constitution, drooped before it. (450)

ここで、Edith は、Skewton 夫人の化けの皮を、剥ぎ取らんとするほど攻撃的な軽蔑を見せているわけだが、注目したいのはそうした強い感情が一沫のためらい、不安もなく “quiet” に発揮されてくることの奇妙さである。そこに Edith が母親をこうした形で「断罪」することによって、自分の「罪」の重荷を転嫁してしまっているような意識を窺うことはできまいか。

またこうした Edith の「墮落」の回避は興味深いことに Edith の激しい自己批判の中にさえも窺われてくるように思われる。絶望的な調子で語られる Edith の自己批判に関して気になるのは、それらが例えば Dombey が明日 proposal をすると予告した晩だとか、結婚の前夜など、彼女自身を取りまく事態が決定的になってから行われてくるという事実である。またそれらがいずれも自己改善に繋がらないまま反復されることにも注意したい。勿論 Edith が Dombey に見捨てられた愛情深い娘 Florence と親交を結ぼうとしたこと、あるいは夫となった Dombey に対して憎悪の応酬をやめることを提案することは、この人物の自己改善の行動として、またその “better qualities” の証しとして注目しておく必要はあろう。しかしそれらは結局余りにも早く中断してしまうのである。とすれば、ただ呵責を繰り返すその反復の中にも、どうも自分を責めているという行為によって自分を憐れむような、純粹の良心の呵責とはいいい切れない「誤魔化し」が潜んでいるといえるだろう。

Edith の「墮落」の回避は今見てきた限りでは幽かな傾向に過ぎない。しかし至る所に出現している点で相当根深い傾向であって、Edith がこれに揺さぶられる人物であることは認めておく必要があろう。もっとも Dombey が proposal を予告した晩の場面、即ち Edith が激しい自己への呪詛とともにその proposal を承諾する旨表明する場面においては、それはもっと強力に出現する。Dombey との結婚を受けることを苦々しげに表明した直後の Edith の言葉に

注目してみよう。

When he [Dombey] came to view me— perhaps to bid— he required to see the roll of my accomplishments. I gave it to him. When he would have me show one of them, to justify his purchase to his men, I require of him to say which he demands, and I exhibit it. I will do no more. He makes the purchase of his own will, and with his own sense of its worth, and the power of his money ; and I hope it may never disappoint him. *I have never vaunted and pressed the bargain...* (473-4)

ここで Edith は、courtship を商品の買付に貶めるような態度を取ってきた Dombey を嘲笑して彼らの関係を「取り引き」としてパロディ化しているが、同時にいわばそうした Dombey を逆手に取ってその責任の総てを彼に押付ける理屈を述べているのである。つまり彼らの「商い」において、自分は「決して売り込まない」売る気のない商人であり、また無意志の「商品」なのだから責任はその「意志と価値観と金力」で決めた買い手にこそあれ、自分にはないという訳である。こうした発言は、Edith を単純な人物と決めつけてきた批評家によっては、Dickens が Dombey の結婚の実態を暴露するために Edith に自分の視点を押しつけた箇所であり、人物造形の浅薄さを示す好例のようにも考えられてきたようである。が、今みてきた「墮落」の現実をできるだけ回避しようとする傾向を下敷きに考えれば不思議はない。のみならず注目しておきたいのは、Edith が特に、「決して自らを売り込まなかった」ことに固執して、「相手を誘惑したりせず」「できる限りはあなた (Skewton 夫人) にも売り込ませなかった」と念を押すように繰り返し、その挙げ句 “I have kept *the only purpose* I have had the strength to form—I have almost said the power, with you at my side.” (474, イタリックは筆者) と、さらに自分の妥協した現実を無視したまま、自分の正当さを強調する発言を重ねることである。このように見てくれば、こうした発言は単に事件の解説のためにあるのではなく、決定的な状況にある Edith の意識内の変化を暗示する内面の dramatization として読めるように思われる。即ち Dombey の求婚を受け入れる自分の現実を歪めて「合理化」したことがここにはっきり示されるのである。

実際 Edith は結婚した後もどこか今見た理屈にこだわっている節もあることを考えるなら (654)、彼女が Dombey と結婚してしまったのは cynical な自棄に陥ったという以上に、どこか都合の悪い部分は抑圧し、歪めて認識しようとする例の自己防衛的な意識に囚われてしまったことによると考えてよいのではないか。だからといって Edith はこれですっかり自分の「墮落」に苛まれなくなったわけではない。ただ、彼女は mercenary な行動を取らねばならない時に、しばしばそうした認識に陥るのである。このように考えれば Edith が何故その結婚式の前夜、良心の呵責に苦しみながらも翌朝になってしまえばむしろ「平然」とした表情で教会に向かうのかも説明がつく。

こうした意識のあり方の底に、morality complex があるということは十分言いうる。Edith

は、そのために、自己の「墮落」の現実を現実として受けとめにくく、自分の行為や態度の主観的意味あるいはイメージばかりを評価し、自分をいわば観念的に「良心的」とし、一方、Dombey を相対的に悪く捉えてしまうのである。そのような「良心」は決して Edith の本質的な良心ではないし、それによって確証されるような「良心的な自分」とは、実に扁平な自分でしかない。また Dombey とて本質的には「悪人」ではないのである。しかし Edith はたとえ半ばその間違いに気づいていても、こうした現実とはズレのある認識、即ち歪んだ「良心」歪んだ「自我意識」に囚われてゆかざるを得ない。そして、こうした認識傾向、内面のメカニズムのあることが主に、彼女が Dombey をあたかも 'vermin' のように見なし (657)、独善的な復讐者へと化してゆく原因でもあるように思われる。

III

実際 Edith が駆け落ちという無謀な手段で、Dombey の高慢を挫く復讐に至る展開は Edith のこうした歪んだ「自意識」に支配される性向を土台に着実に積み上げられてゆくように思われる。我々はまずその「迷妄」の萌芽を Dombey の視線を通して把えられる結婚直後の Edith の小さな変化に見ることができる。

An expression of scorn was habitual to the proud face, and seemed inseparable from it, but the contempt with which it received any appeal to admiration, respect, or consideration on the ground of his riches, no matter how slight or ordinary in itself, was a new and different expression, unequalled in intensity by any other of which it was capable. (583-4)

今や Edith は Skewton 夫人に向けていた強烈な軽蔑を Dombey に示すようになったというのである。こうした変化は、尊大で無神経な Dombey に身近に接して生じたというよりは、むしろ富を得たことで「墮落」がいよいよ重くのしかかってきた Edith の固有な内面にその原因が求められるものであろう。そうした不安苦悶から逃れる最も手取り早い方法はもはや Skewton 夫人を責めることではなく、mercenaryness を拒否したい自分に対して敢えてその刻印を押しつける「非道」な Dombey を否定する行為に頼ることなのである。

ここで忘れてはならないことは、Edith が「非道」と決めつけている Dombey の「無理解」とは、結局 Dombey が真に悪人であることから生じるのではなくて、むしろ彼自身なりの自己不安から頑なになっている「自意識」からくる盲目さであるということだ。だから、この点で Edith は、Dombey が Edith に対して盲目的で無理解だったと同様、Dombey に対しても盲目的で無理解だったといえるだろう。Edith が、この後 Dombey に対してさらに冷たい否定をつきつけ出すもう一つの大きな要因は、だから両者の間に存在する相乗的に増さざるを得ない誤解にあるともいえるのだ。Edith の反抗によって苛だった Dombey は大変な「思い違い」としてこれを権威で「正す」ことしかせず (650, 747)、また Edith はこれによりより一層当然のこととして Dombey の非人間性を糾弾するようになってくるのである。

こうした複雑な悪循環のサイクルをさらに早めた要素に Carker の存在も見落すことはできない。Carker といえば、それこそ典型的 villain と考えられる人物であろうが、ただ Edith との関連でいえば、彼は彼女の「すべてを知る」あるいは「彼女を最も悪く見る」「眼」をもった存在として迫力をもつ (474, 607)。というのもその「眼」こそは、Edith の空転する「自尊心」の総ての虚妄を彼女の眼前に示す役割を果たすからだ。そしてこのように考えるなら Edith がむしろ邪悪なこの人物の接近を許すことも、あながち不自然ではなくなってくる。というのは、それは Edith の一種の self-punishment かもしれないからだ。Dombey, そして Carker らとつくるこうした心理的な緊張関係に加えて、あと Florence との交流を Dombey の嫉妬によって中断せざるを得なくなったこと、あるいは際限のない憎悪の応酬をやめて人生を建てなおそうという申し込みを Dombey の盲目によって一蹴されたことも Edith の歪んだ「自尊心」への囚れに一層拍車をかけることになった契機として見過せない。というのは、それにより Edith は自分の救済の道は閉ざされたと感じざるをえなかったはずだからである。

Edith が Carker とニセの駆け落ちをすることによって Dombey の社会的体面を丸潰れにする行為とは、Edith にとっては自分の「良心」の精一杯の主張ではあった。しかしそれは歪んだ「良心」の、歪んだ「自我」の主張に過ぎなかったのである。駆け落ちの直前に行われる Dombey との最後の会見の席で (そこに Florence と Carker という彼女の救済と破滅の鍵が配されるのは偶然ではない) Edith が喘ぐように吐き出す言葉は印象的である。それは単に Edith の意固地さを示すからではなく、Edith の自己に対する実感の所在を示してその内面の歪みをいいあてているからである。

…for her [Florence'] sake, I would now if I could—but I *can not*, my soul recoils from you too much—submit myself wholly to your will, and be the meekest vassal that you have! (748)

Edith はもはや Florence のために忍ぶことはできないのである。というのも彼女はあまりにも深く Dombey を否定する「自分」に囚われてしまっているからである。その意味でこの発言は最終的に Edith が取る行動—即ち虚妄の「自尊心」のためにだけ行動することを予告するものと考えられよう。

結

以上 Edith がその良心を読者に感じさせながら、実は彼女なりの打算的欲望をもつ人物であることを示してきた。そして彼女が意外な無謀さや冷笑癖を持ち、さらに複雑な心理的屈折をもつ女性であって、そのために本来の信念とは異なった行為を重ね、遂には破滅を招くことになったことを考察した。結果として Edith の物語は、一見 melodramatic な枠組みを備えているものの、実質的には悲劇的要素を内包していることが明らかになったと思うのである。一歩進んで彼女と Carker との関係に照明を当てて、そこにおける彼女の complex sexuality を浮き彫りにすることも可能であるが、その問題については他日を期して改めて考察を加えたい。小論においては、専ら Edith という人物像の深層を探ることに論点をしぼり、小説全体の

枠組みの中での彼女の悲劇性の諸要因を提示するにとどめた。特に彼女の「良心」と「自尊心」とのメカニズムが、たとえ程度や色合いの相違こそあれ、主人公 Mr. Dombey の破滅の要因と共通点を有するのは興味深い。Edith も Mr. Dombey も共に、己れの人間的「欠点」を直視するという姿勢を避け、それに伴う不安を払拭するための手段を、「良心」、あるいは「権威」という意識的な満足感に求めた。しかしそれは一種の観念をもって、自らを縛り、Lawrence Frank も言うように、縛られた自己観の支配を受け入れることに他ならない¹²。もちろんそれは、単なる性格の問題にとどまるものではなく、それぞれの社会的、身分的な問題と大いに関係がある。とりわけ「血筋」のよい出生の背景を持つ Edith にとっては、否応無しにその社会的、身分的しがらみに身を委ねざるを得なかったがゆえに、tragic heroine になる宿命が避けられなかったのである。

原稿受理 9月30日

注

- 1 "The First Major Novel: *Dombey and Son*" *Dichens the Novelist*, by F. R. Leavis and Q. D. Leavis, (Harmondsworth: Penguin Books, 1980), p. 48.
- 2 "Edith is firmly rooted in the kind of Victorian melodrama that points a strident social moral." Michel Slater, *Dichens and Women* (London: Dent, 1983) Chap II, pp. 262.
なお Slater は最近までの Edith 批判のポイントをほぼ網羅した上で彼女を上記のように結論づけている。
- 3 Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties* (London: Oxford UP, 1962), p. 179.
- 4 Leavis, op. cit. p. 48.
- 5 Barbara Hardy, *The Moral Art of Dickens* (New York: Oxford UP, 1970), p. 63.
- 6 "Edith, carefully protected by Dickens from any breath of his own life-giving comic genius, —stiffens into rather pasteboard creature. . . ." Slater, op. cit. p. 261.
その他同様のことを John Carey が *The Violent Effigy: a Study of Dickens' Imagination* (London: Faber, 1979) で、Angus Wilson が、*The World of Dickens* (London: Secker, 1970) の中で述べている。
- 7 Ian Milner, "The Dickens Drama: Mr. Dombey" *Dickens Centennial Essays* ed. Ada Nisbet and Blake Nevius (Berkeley: California UP, 1971) ,p. 157.
- 8 Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, (New York: Simon, 1952) ,Vol. 2, p. 642.
- 9 Charles Dickens, *Dombey and Son* (Harmondsworth: Penguin Books, 1970) . 引用はこの版により、引用文及び言及箇所あとに () を付した頁数を記す。
- 10 "Many young ladies plunged as quickly as possible into matrimony to escape the nervous stress of life at home and the watchful eye of Mama." Stella Margetson, *Victorian High Society*, (New York: Holmes, 1980) p. 129. 当時の上流階級の未婚の女性は、厳重な母親の監視のもと、絵画、音楽、刺繍等 accomplishments の修得と domestic duties を中心とする閉鎖的家庭生活を強いられていたため、退屈と不満から逃れようとして結婚してゆく傾向があったという。もっとも結婚生活とは結局それまでの彼女達の生活の延長—しかも誇張された延長—でしかなかったのであるが。Edith の先に挙げた発言には、こうした女性達と共通する心理が窺える。
- 11 A. O. J. Cockshut, *The Imagination of Charles Dickens*, (New York: New York UP, 1962), pp. 106, 105.
- 12 Lawrenre Frank, *Charles Dickens and the Romantic Self* (Lincoln: Nebraska UP, 1984) , pp. 40-43.